

# 計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

## 会報 2010-7

発行日：平成22年8月30日

発行元：（社）計画・交通研究会

### 目次

Opinion .....	1
技術者の議論	
News Letters .....	2-6
事業報告・活動報告	

## □ Opinion

## 新しい「この国のかたち」

平野 勝也

司馬遼太郎氏なら、「この国」が経験した、激動のこの20年に潜む本質を、なんと解きほぐしてくれるのだろうか。1990年から2010年までの土木学会の正史を編纂する日本土木史編集特別委員会で総括幹事を務めよ、とのご下命を受けて以来、折にふれ、そんな感傷めいた気分が、ふと頭をよぎるのだ。氏が、他界したのは、この激動の20年が始まって間もない1996年である。以降、「この国」は、さらなる激動の時代を歩んできた。話を土木の世界に絞って言えば、その激しさは、より鮮烈なものとなるのではないだろうか。そして、「この国」全体よりも、ことは深刻のように思える。しかも、土木は、長い時間をかけて、「この国のかたち」さえも変えてしまう力を、内在しているのだ。

土木の世界が激動に晒されている原因は、浅学な筆者にも、簡単に思いつく。その多くは、制度疲労という言葉で集約できるのではないだろうか。「高度成長のための迅速且つ大量の社会基盤整備」のために今の制度は作られてきた。高度成長は終わったのだ。しかし、今は、根本的な制度の修正が時代の変化に追いつかないまま、制度疲労による瓦解に向かって走り続けているのではないかという恐怖心さえ抱く。

その筆頭格は、入札制度だろうか。様々な修正がなされてきたが、時代に追いついたとは思えない。その結果、土木業界は、調査、計画、設計、施工の全てにおいて、有り体に言えば、「手を抜けば抜くほど儲かる業界」になってしまっているのだ。例えば、設計業務では、落札した時点でコンサルタントの収入が決まる。利

潤を最大とするためには、支出を減らす以外に方法はない。支出の多くは人件費である。その結果、よりよい設計の為に手間暇かけて工夫するエンジニアを、経営陣は叱り飛ばすのである。「そんなものに時間をかける暇があったら、こっちをやれ」と。迅速に大量に作る事が至上命題であった時代は、まさに、それが国益に適合していたのだが。この枠組みで、筆者が専門とする、よりよい景観整備などは、望むべくもない。そして、ことは景観・デザインだけに留まらない。あらゆる技術的な工夫が評価されない業界に、果たして未来はあるだろうか。

道路整備制度も制度疲労により、瓦解が始まっているように見える。都市間道路から都市内道路へと、整備の軸足を移すことが間に合わず、国主導の都市間道路の整備に軸足を置き続けた結果、「無駄な道路」という批判が噴出し、道路特定財源は、脆くも崩れ去ってしまった。水資源開発を中心に据えたダム開発も、治水への軸足を移すことが遅れたように思う。構造計算や需要予測が設計や計画だと嘯き、本当の意味での設計や計画を教えることを忘れた大学教育もしかりである。制度疲労は、ありとあらゆるところで、土木業界を蝕み始めているように思えてならない。

話は変わるが、鈴木忠義先生の薫陶を受け、景観・デザインを専門とする人間は、実際の設計・計画に携わることを誇りとしてきた。篠原先生に言わせれば、「我々は空中戦ではなく、ゲリラ戦だ」と言う事になる。筆者もそうした、ゲリラ戦線を張っているが、ここ何年かでその

内容は、随分と変容してきた。橋のデザインといった構造物単体への参画が減り、明らかに、まちづくりといったより複合的な内容の仕事を手伝う機会が増えているのだ。これは、筆者だけの出来事ではない。篠原修先生に至っては、今や、国土交通省よりも文化庁の仕事の方が多いと仰っておられた。さらに、景観に限らずとも、交通分野や計画分野の諸氏も、審議会といった空中戦への参画ではなく、個別具体のまちづくりや地域おこしといったゲリラ戦への参画が随分と増えているのではないだろうか。そして、土木出身のデザイナーである西村浩氏が設計した岩見沢駅が、昨年、グッドデザイン大賞を、今年、建築学会賞を受賞した。その受賞理由は、建物のデザインではなく、まちづくりである。仲間の快挙は素直に嬉しいものであるが、それだけでなく、まちづくりへの関わりがデザ

インの賞においても評価されるという、新しい時代の到来を感じさせる象徴的な出来事でもあった。

こうした、土木の複数の分野で見られる、まちづくりや地域おこしへのシフトは、土木の世界が、新しい時代へと、着実に展開を始めている証左ではないだろうか。高度成長以来の、制度疲労による土木業界の瓦解を悲観することはないのだ。その瓦解の中に、新しい時代への胎動が、着実に存在しているのだから。もちろん、変えなければならない制度は山積している。しかし、土木業界に未来がないわけではない。必要なのは、瓦解を恐れ守旧に走るのではなく、瓦解を恐れず、新しい「この国のかたち」が作られていくのを、再び支えていく自負と勇気ではないかと思うのである。

(東北大学准教授)

## □ News Letters

## 事業報告・活動報告 □

### ■第10回 麴町サロン(国土について語る会)

(平成22年7月7日)

中村英夫 東京都市大学学長 (当研究会特別顧問) より、1)『平成の大合併に際しての新都市名の評価』および2)『東京のインフラストラクチャー -その発展と今後-』と題して多岐にわたって話をされ、参加者との討論・会話をおこなった。

#### 1)『平成の大合併に際しての新都市名の評価』

平成の大合併にともなって命名された全国の自治体名称について、麴町サロンの参加者から募ったご評価をもとに、評価できない市名と好感のもてる市名に分けて、その評価要素を分類して具体的な市名とともに例示された。

評価できない要素をもった市名

- ① 地域の特質と関係なく見かけのイメージを繕った市名
- ② 大都市近傍を示すだけで文化度が疑問視される市名
- ③ 他の地域や広域の地名を借用した市名

- ④ 意味のない修飾語や流行語をつけた市名
- ⑤ 永年なじんでいたのになかな文字にした市名
- ⑥ 他の都市とまぎらわしい市名
- ⑦ 観光地の名を冠した、売らんかなの市名
- ⑧ まったく無意味な市名

好感のもてる市名

- ① 歴史的によばれてきた地域名をとった市名
- ② 地域内の河川、山岳等の名を用いた市名
- ③ 合併市町村の名をセンスよく残した市名
- ④ 地域やそこの特徴を適切に表した市名

合併とともに名称が変わって危惧されるのは、種々のデータが不連続となり、さまざまな歴史の断片が失われていくことだ。一部の市町村ではすでに新市名に対する市民レベルでの議論も出てきているが、議論をどのように発展させるかに難しさがある。西欧(仏、スイス)では、キリスト教区に由来する自治体名も多く、そのこだわりはつよい。

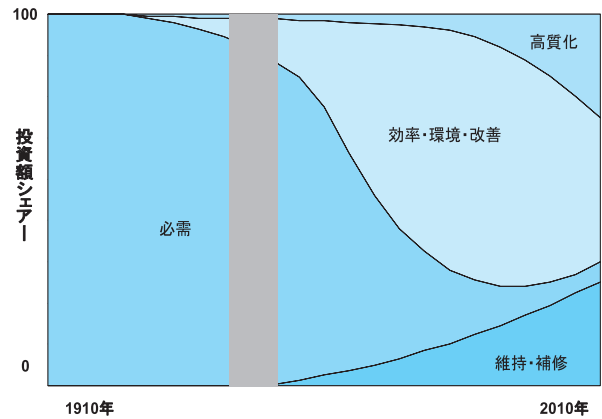
道州制論議は下火になっているが、都道府県の思惑は強く合意の過程はきわめて難しい。港

湾の位置づけは、数を絞ったコンテナ扱いの拠点港湾だけにしていくのは日本の経済からは得策ではない。(コンテナ物流について、世界での急速な発展過程を紹介している、マルクレビンソン著「The Box」(紀伊国屋書店邦訳)が紹介された。)

## 2) 『東京のインフラストラクチャー —その発展と今後—』

江戸末期以来現在にいたるまでの東京のインフラの変容を、数多くの貴重な図表、絵、写真で紹介された上で、今後魅力にあふれる世界都市にしていく必要性を強調され、その具体的提案を動画で紹介された。

- ・ 100トンクラスの多数の船舶が出入りした港湾・河川での物流と江戸の商業活動
- ・ 世界の近代都市でほかにはない東京中央駅(海外では最近のベルリン、ローマくらい。)
- ・ 関東大震災後の復興で、区画整理・街路は世界的にみて大規模に行われたが、結果的には狭い路地が多い。横須賀・横浜のドックなどの被害は表にはされなかったが、昭和初期には洪水対策に大きな効果を生んだ荒川放水路が建設された。
- ・ 大戦後からオリンピックにかけては、地下鉄、道路、水門、埠頭、ガス、下水道などの都市インフラが作られた一方、東京にサービスする発電所や貯水ダムが地方に建設された。
- ・ これまでは「必需」とされたインフラに力が注がれ、その後「効率・環境・改善」をめざした投資が主であった。しかし今後は「維持・補修」が多くなる必然性があるが、さらに魅力ある都市へと変えていくには、「高質化」に向けた投資を増やしていかねばならない。狭い街路や都市河川、交通路の平面交差、貧弱で不安な防災機能などまだ改善していくインフラは残されている。
- ・ その一つの具体的な提案として、日本橋から市ヶ谷あたりまで外堀通り沿いの一帯で、幹線道路を地下化し、河川の護岸・堤体を改造して、地上空間を巨大な防災機能



をもった都市公園とする都市開発構想が動画で紹介された。海外では、近年のソウルの清溪川やデュッセルドルフのラインプロムナードで実現され、国内でも小規模ながら札幌の創成川通りで道路・河川・公園の整備事業として進められた。

(文責 事務局 水野)

## ■2010年4月 計交研・当て塾共催セミナー (第Ⅹ講・第1回)

●日時：平成22年4月14日(水)17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

2010年度の共催セミナーの進め方

●参加者：17名(うち計交研関係6名)

〔講義概要〕

### ◆観光企画(その1)

新しい年度を迎え、「観光原論」に続く展開として、「観光開発の諸手法」の研究に入りたい。「観光原論研究」については、別途、深化・完成させる。

私が基本的な構成を提示し、セミナーの参加者からの報告により進めたい。観光に限らず、まちづくり全般にわたる諸手法を取り上げ、有志5・6名を核に、出版に向けた取り組みとしていきたい。

〔各回のセミナーの構成案〕

①観光開発の諸手法の基本事項(鈴木)

②諸手法に関する報告(参加者1～2名)

※「観光原論研究」は2ヶ月に1回程度

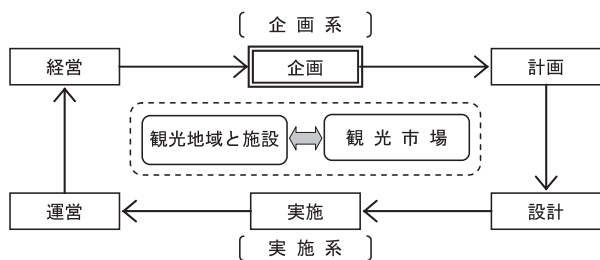
□研究の項目(案)

〔主題〕観光開発 その企画から計画まで

# 1. 緒論

## 1. 観光の推進は企画がすべて

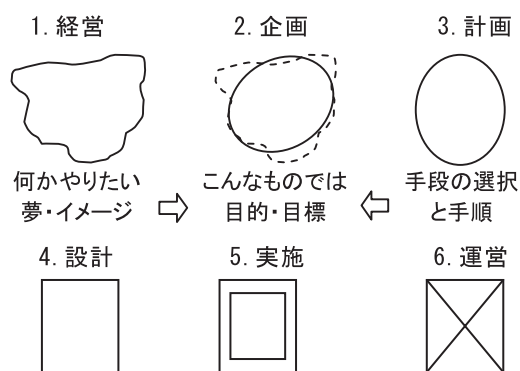
観光には下図（「観光原論研究テキスト」P. 10）の6つの段階があり、「企画」が最も重要である。その他の段階は他分野の成果が応用できるが、「企画」については十分な整理がなされておらず、今回の検討とした。



## 2. 企画から計画までの段階は

企画は、経営者（あるいは観光者、観光地）が行いたいこと（夢・イメージ）に、これを実現する手段と手順を重ね合わせることで、目的を設定する（図の斜めの楕円を描く）ことと言える。

企画は、目的から目標を得て合意形成にたどる。合意を得た部分を具体的に詰めたものが計画で、手順に従って、設計－実施－運営へと展開していく。



\*計画から運営は、整った形式がある。

## 3. そのための作業は

合意を得るまでの「企画」には、調査－分析－評価－予測－総合－合意 という6つの作業が必要である。

## II 調査論

的確な目的・目標を設定するために調査が重要であり、下記のように分類できる。皆さんで、調査論を確立していってほしい。

- (1) 制約条件（与件）
- (2) 前提条件（上位・下位計画）
- (3) 市場調査
- (4) 資源と対象の調査
- (5) 手法の調査
- (6) 実現可能性の調査、採算可能性の調査

## III 魅力の創出

もの（場）とこと（もてなし）が一緒にあることが重要で、文化の蓄積がない地域では十分な魅力を出すことができない。

- (1) 手法の選択
- (2) もの 場づくり (ハード)
- (3) こと 広義のもてなし (ソフト)  
(旅行プログラム、場の活用 等)

## IV 合意形成の方法

原論で示す「三方よし」の問題である。観光者、観光地、観光業のそれぞれが“よし”とする合意の方法を検討するものである。

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

## ■2010年4月 計交研・当て塾共催セミナー (第X講・第2回)

- 日時：平成22年4月28日(水) 17:00～20:00
- 場所：計画・交通研究会会議室
- 講師・演題

- ①「当て塾」塾長 鈴木忠義先生  
観光開発 その企画から計画まで (1)
- ②(株)野倉計画事務所代表 野倉淳氏  
調査・企画・計画の業務と技術の整理

●参加者：14名（うち計交研関係5名）

### 〔講義概要〕

#### ◆観光開発 その企画から計画まで (1)

「観光開発の諸手法」に関して私から提示する基本的な構成につて、主題を「観光開発 その企画から計画まで」とし、以下の構成で研究を進めることとした。

- I 観光企画の概念
- II 観光企画の意義
- III 観光企画の理論と方法
- IV 観光計画への接近

### I 観光の概念

#### 1. 観光企画とは

- (1) 観光企画の位置づけ

経営－企画－計画－設計－実施－運営と続くなかで、観光の企画は以下のような役割があり、最も重要である。

- ・事業推進の原動力、導火線、口火
  - ・地域の方向性と動機づけ
  - ・地域の活性化と合意形成
  - ・関係者たちへの判断材料の提示
- 計画以降は各論であり、企画は総論である。  
総論の中に各論があることが重要である。

## (2) 観光企画の提示内容

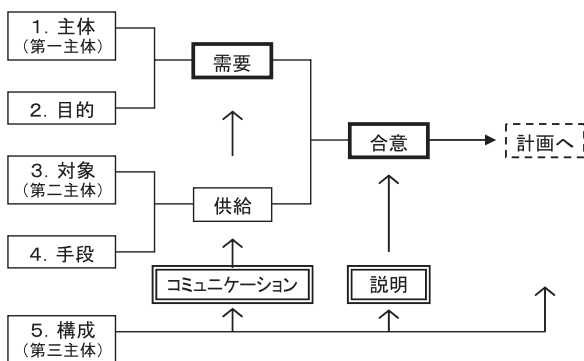
### ①ネーミング

趣旨を的確に表したネーミングが重要である。その一例で、「世田谷川場ふるさと公社」は世田谷と川場の交流を表現している。また、「当て塾」は、当てを付けることと、当てになる人材を育成することを表している。

### ②展開・構想・概要－5要素

“なるほどそうか”と理解される概略を示すことが重要である。内容は、次図の5要素が含まれている必要がある。

企画で提示する内容に必要な5要素



### (3) 効果

“絵空事ではない”と納得されるよう、効果の提示が必要である。第一主体（観光者）、第二主体（受け地）、第三主体（観光企業等）のそれぞれにとっての効果で、“三方よし”の効果を示す必要がある。

### (4) 各論

どのような構成かについて、点－線－面、ハード・ソフト、全体と部分（複数の目玉）といった観点で示す必要がある。

### (5) タイム・スケジュール

どの程度の期間かを示す。企画では、20年

程度の将来を想定する必要がある。

### (6) 収支概算、資金、償還

官民を問わず、費用の提示が必要である。

### (7) 担当者群

関係した人を明示する。知的所有権も含む。

## ◆観光企画関連報告1（野倉淳）

### 調査・企画・計画の業務と技術の整理

調査機関が受託する調査・企画・計画に関する業務は多岐にわたり、要求される技術も異なる。これらには、ある程度確立された技術と、確立されていない技術（技術とっていないものも含めて）がある。観光関連の業務においては後者が多くを占めると思われ、意識がなければ「重要な技術」であることを見逃してしまうことがある。

このような状況認識から、観光をはじめとする調査・企画・計画の業務に求められる技術を認識し、その充実を議論していくための枠組みとして、初歩的な整理を提示した。

（文責：「当て塾」事務局 野倉 淳）

## ■2010年5月 計交研・当て塾共催セミナー （第X講・第3回）

●日時：平成22年5月12日（水）17:00～20:00

●場所：計画・交通研究会会議室

●講師・演題

「当て塾」塾長 鈴木忠義 先生

特別講義：草津町の観光開発計画について

●参加者：21名（うち計交研関係8名）

〔講義概要〕

特別講義として、1968年から1977年の3つの草津町の観光開発計画を概説した。

私が草津に関わったのは1960年頃からであるが、当時の草津には私と年齢が近く“やる気のある人たち”が多数おられ、草津発展の基礎がつくられていった。そうした中での下記のレポートは、観光開発や地域整備という新しい分野の研究の実験的なアプローチを行ったものである。

## ◆群馬県草津町の観光開発計画

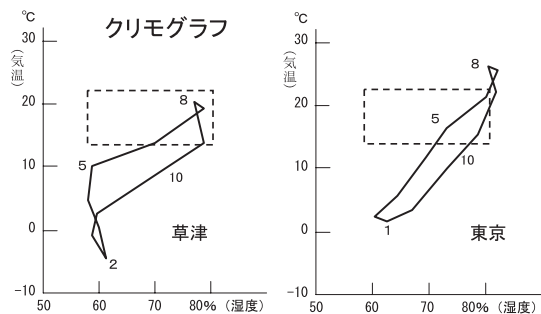
### 1. 「草津観光開発基本計画 案 1968」

（1967.10 草津町・（社）日本観光協会）

（社）日本観光協会の予算により実施されたもので、ハンセン病の療養所立地と湯治場とい

イメージから脱却してリゾートへ転換することを目指して、町の若い担い手を中心に検討が進められた。技術改革により引湯が可能となったことから高原部の活用を提案し、現在のベルツ通りなどが実現している。

資源性と市場性を明確に示すことが大切であり、その一例で、ウェインター（サマー）リゾートとしての適性を、気温と湿度の関係を示したクリモグラフ等を用いて説明した。



また、町民の合意を得るために、模型を製作・展示して、具体的な計画内容を提示した。初年度は現状の模型を展示し、次年度に計画を盛り込んだ模型を提示した。

〔目次〕 まえがき／計画にあたって／Ⅰ草津の自然条件／Ⅱ高原の観光利用／Ⅲ草津の高原観光都市立地／Ⅳ草津の現況分析／Ⅴ開発基本方針／Ⅵ草津町域白根山のスキー場開発／Ⅶ草津町域高原の全体計画／Ⅷ地区計画／Ⅸ開発順序計画

## 2. 「草津白根・横手山地区におけるスキー・エリアの検索と可能容量の検討」

(1973.7 アースデザイン研究会)

草津町の独自の予算で、国体のスキーを誘致

することを目的に、どのようなスキー場が可能かを検討したものである。地形を検討することから、「アースデザイン研究会」なる会を組織して検討を行った。

空中写真を活用して、メッシュ単位で情報を整理して活用するD.P.M.S (Digital Photo Map System) によって分析作業を行った。

複数のスキー場開発適地を示し評価するとともに、開発形態も提示している。

〔目次〕 序章 作業手順と結論の要約／第1章 調査の課題／第2章 スキー・エリアの立地条件／第3章 スキー・エリアの検索／第4章 開発形態の検討／第5章 今後の課題

## 3. 「草津町 社会開発計画」

(1977.3 (財) 日本交通公社・観光計画室)

観光だけでなく、地域の人々の様々な生活環境をどのように整備していくかについて、住民との対話を基本に検討を進めた。

対話の手法として「買い物ゲーム」を導入した。このゲームは、10年間の予算を財布に見立て、与えられた財布の範囲（持ち点）で住民が買い物をする（希望する整備を選択することで点数を支払う）もので、住民が合意形成の過程を身近に体験する手法である。

〔目次〕 第1章 草津町の現状認識／第2章 町づくりの目標と方法／第3章 政策への住民要求／第4章 町づくりのための政策体系／第5章 施策のプログラム／補章（住民参加）

(文責：「当て塾」事務局 野倉 淳)

### (社) 計画・交通研究会

会長 森地 茂  
副会長 石田 東生  
副会長 家田 仁  
副会長 屋井 鉄雄  
事務局長 水野 高信  
会報編集委員長 中井 祐

〒102-0083  
東京都千代田区麹町5-2-1 K-WING 6F  
TEL=03-3265-1774  
FAX=03-3221-5489  
E-Mail=  
jimukyoku@keikaku-kotsu.org  
Homepage =  
http://www.keikaku-kotsu.org/